

脇の浜ふるさと化プロジェクト

プロジェクトメンバー：経営学部4年、経営学部4年、経営学部4年

指導教員：内田浩史、砂川洋輝

【内容】

①アイデアのブラッシュアップ

2022年後期に行った「FBLX 神戸市課題解決プロジェクト」で作った「脇の浜思い出アルバム」のアイデアを実装化に向けて練り直しをし始めた。脇浜で1, 2歳児のような小さい子供にも思い出を作ってもらいたいという想いから、アルバムとミッションを掛け合わせたサービスを作ることにした。1カ月半の間、脇の浜に住む親子に協力してもらい、脇浜ならではのミッションをこなす様子を写真に収めてもらった。

②アルバムと写真について

話し合いを進める中で、使用する写真はL判とチェキで意見が割れた。L判はコンビニや自宅で簡単に印刷することができる。一方で、チェキはその場で印刷することができるため、プリンターがないご家庭やプリンターで印刷するのが手間だと感じる人でも簡単に手元に写真を残すことができると考えた。どちらの方が評判がいいのか確かめるため、L判とチェキのどちらも用意することにした。

アルバムの形はオーソドックスなA4タイプ、L判写真が入る自立するタイプ、L判写真とチェキの両方を入れられる3タイプを用意した。A4と自立するタイプのものは両方とも既製品であるが、L判とチェキの両方を入れられるものは理想のものが売っていなかったためメンバーで作成した。

A4のものは大きくて収納するのに場所をとるというデメリットがある一方で、1ページに何枚も写真を収められるため他のタイプのアルバムよりもたくさんの写真を一度に見られるというメリットがある。

自立するタイプはリビングなどの普段目にする場所に飾ってアルバムを日常の一部にしてほしいという考えのもと購入した。A4タイプとは違って飾れるため、写真と思い出をより身近に感じてもらえるというメリットがある。一方で、デコレーションをすることができる余白がなく、オリジナリティを出すのが難しいというデメリットが存在する。

L判写真とチェキの両方を入れられる3タイプは、文字通り、L判写真とチェキの両方を入れられるという部分がメリットである。しかし、メンバーの手作りであるため、他の2タイプと比べると見劣りしてしまうというデメリットが存在する。

③ミッションについて

脇浜ならではのミッションを1週間に3個、計18個用意した。簡単にミッションをこなせるように、ミッションの他にヒントも用意した。たとえば、「ミッションとヒントの例を挙げる」である。脇浜と関連付けたミッションを用意することで、住んでいる地域で簡単にクリアすることができるだけでなく、地域でのつながりを作り、愛着を持つことができるのではないかと考えた。

しかし、後日のアンケートにはミッションがつまらないという意見があったため、ミッションの内容は見直す必要があると考えられる。

④アルバム配布の感触

前述の通り、3種類のプロトタイプを用意し、12組の家族に先着順で受け取ってもらった。最も人気のあった型は、4枚のL判写真を一覧化できることを売りにした型であるオーソドックスなA4タイプであった。その理由として考えられるのが、体裁が整っていたことである。最も費用がかかったプロトタイプであること、装丁がシンプルで重厚感があったことが、親御さんのファーストインプレッションを良くしたと考えた。L判写真とチェキの両方を入れられるタイプは、上記の理由から、手作り感がマイナス印象を与えたのではないかと予想される。

⑤イベントについて

5-1 写真印刷会

当日は非常に暑かったが、2組の親子に足を運んでいただいた。2組とも用意した積み木や魚釣り、ボールを使って遊んでくれた。

1組目の親子は、アルバム配布の日程が押してしまったこともあり、ミッションをこなせていなかった。しかし、「脇浜でも釣れる魚を食べてみよう」というミッションをクリアするために、魚を買って食べるつもりではあるとのことだった。せっかくなのでスマホに眠っていた写真を印刷し、家に持ち帰ってもらった。また、当日遊んだ様子をチェキで撮影し、親子に渡した。子供は出てくるチェキに興味津々で、2人ともチェキに対する反応が良かった。

2組目の親子は、家族全員で会場に足を運んでくれた。うまく意図が伝わっていなかったらしく、以前スマホで撮影した写真を印刷し、アルバムの空欄を全て埋めてしまった。しかし、以前撮影した脇浜の写真を見返す機会になったため、写真を見返してもらうという目的は達成できた。しかし、写真を見返したのはほぼ母親だけだったため、子供も巻き込んで親子全員で思い出を振り返ってもらうためにはどうしたらいいかが今後活かすべき点であると考えた。

周知が十分でなかったこともあり、人を呼び込む事ができなかったことが反省点である。また、アルバム配布が遅れたにもかかわらず、印刷会を強行してしまったため、本当にこのタイミングで印刷会を行うべきかどうか、他にも印刷会の日程を用意して再度周知をするべきではなかったかと考える。

5-2 減災サマー・フェス

人と防災未来センターにて行われた「減災サマー・フェス」にブース出展をした。内容は、脇浜での思い出を残してもらうことを目的に、チェキでの撮影会を行った。さらに、撮ったチェキをその場でデコレーションできるスペースを設けた。

脇浜は通勤族の人が多く、地域との結びつきを作りにくいと言われている。アルバム作りに参加していない人たちが脇浜での思い出作りをするきっかけになれば、という思いで減災サマー・フェスへの参加を決意した。

当日は予想を超える約100名の方にチェキを撮っていただいた。就園前の赤ちゃんや保育園・幼稚園児だと思われる小さな子供たちだけでなく、小学生や中学生、大人の方々にまでチェキを撮っていただ

けた。単に自分のスマホで写真を撮るのではなく、ブースで写真を撮ってデコレーションをするという過程を踏むことで、脇浜での思い出を増やすことに貢献できた。

⑥前期の改善点

前期のプロジェクトにおける改善点は、大きく分けて「アルバムを利用してもらえなかったこと」、「継続的な運用が難しいこと」の2つだった。アンケートを採った結果、アルバムを利用した人はいなかった。そもそもアルバム自体に興味を持っていない可能性や、アルバムを作ることが面倒くさいと感じている可能性があったので、アルバムという形を変える必要があった。

継続的な運用の課題としては、ミッションを考え続けなければならないというものがあった。アルバムに載せるミッションは、1年分だけでなく、何年分もの壮大な量を考える必要がある。そこで、誰かにプロジェクトを委託した際に、誰がミッションを考えるのかという課題が立ち上がった。さらに、利用者には継続的かつ自主的に行ってもらわなければならない。そうとなると、親にとって魅力的なミッションを考える必要がある。しかし、それを行うのは難しいと考えたため、改善する必要があった。

上記の改善点を踏まえ、新たに考えたのが、「モザイクアートの配布」と「脇の浜フォトアドベンチャー」の2つだ。1年間の集大成として撮った写真をモザイクアートにして渡すというものだ。その中で、脇の浜で思い出を作れる「フォトアドベンチャー」というイベントを年に数回開催しようと考えた。

⑦モザイクアート

ミッションを重視することによって継続的な運用が困難になるという前期の反省を踏まえ、ミッションというアイデアを捨てる決断をした。大体1週間に3個のペースで取り組むことを想定したミッションを捨てることで、利用者に継続的なコミットメントを促さなくて済むようになった。また、提供者側も継続的にミッションを考案する必要がなくなり、大きな負担削減に繋がると考えた。

ミッションというアイデアを取り除いたことにより、我々はアイデアの方向性を非日常感や特別感、低頻度のコミットメントへとシフトチェンジすることができた。これらの方向性を踏まえた新たなアウトプットの形は、一年間のまとめとしてのアート作品である。このアイデアを実現することができれば、アルバムという形から脱却することができ、前期の課題の一つである「アルバムを利用してもらえなかったこと」を乗り越えることができると考えた。

次に、どのようなアート作品を提供すべきかという点について、「モザイクアート」の形を選択した。「モザイクアート」とは、デジタル的に写真を寄せ集めて絵や模様を表す装飾美術の手法である。複数の写真を寄せ集めて、たくさんの写真情報を一枚に格納できることは、我々の元来のアイデアであるアルバムの性質を大いに含んでいる。そのため、本プロジェクトと非常に親和性の高いアウトプットであると考えた。また、モザイクアートを所有している家庭は数少なく、希少性も高いため、非日常感や特別感といった方向性もカバーできるものと考えた。

モザイクアートを作成するにあたり考慮した点は、写真の収納量と1ピースの解像度のバランスである。写真をより多く使おうと思うと、1ピースのサイズはごく小さくなり、なんの写真なのか判別ができなくなってしまう。一方、一枚一枚の写真の内容を簡単に判別できるようにすると、1ピースのサイ

ズが大きくなり、使用できる写真の枚数が限られてしまう。このトレードオフの関係を考慮し、最終的な落としどころとして、0.75 cm四方の写真を1ピースとすることにした。以上のような議論の下、決定したモザイクアートの枠組みを、モザイクアートを作成し手渡すテストによって確かめた。

テスト当日には、モザイクアート作成ソフトを使用し4枚のモザイクアートを完成させた。素材となる写真は、下の「フォトアドベンチャー」で撮影してもらった写真と日頃親御さんが撮り貯めていたお子さんの写真を用いた。制限時間内に完成させることはかなわなかったが、後日受け取っていただいた際に以下のようなアンケートを取ることができた。

アンケートを回収できた2名の回答者はどちらも、モザイクアートの完成度について「大変良かった」と回答した。また、サイズについては飾るのに難しくないという回答を、1ピースごとの写真についても十分に判別できるという回答を得ることができた。また、回答を得た2人はどちらもモザイクアートに触れたことがないということだった。

このことから、モザイクアートを受け取った際に心を動かされたのではないかと推測できる。その後のことは分からないが、もし部屋に飾ってくれたならば、日常に溶け込み、時々写真を見返しながら思い出を振り返ることで、脇浜との結びつきを感じて貰えるのではないか。

⑧フォトアドベンチャー

アルバムのミッションの方向性を変え、1日から1カ月単位で行う「脇の浜フォトアドベンチャー」を考案した。脇浜には目を引くオブジェクトがたくさんあるので、オブジェクトと子どもと一緒に写る写真を撮ってもらうことにした。

当日は4組の親子に参加していただいた。子どもの年齢は2～6歳だった。「たからのちず」という名のオブジェクトの写真とマップが一体化したものを渡し、1時間という制限時間の中でスポットを回ってもらった。スポットはHATゆめ公園からマンションの18番館までの範囲に分布するようにした。その結果、4組中3組が全てのスポットを回ることができ、どの組も1～3分前とちょうどいい時間に戻ってきてもらえた。そのため、今回設定した難易度はちょうどいいものであったと言える。

アンケートでも「難易度がちょうどよかった」、「普段は行かない場所にも行けた」という肯定的な意見が数多くあった。一方で、「普段いかない場所には行けなかった」、「もっと参加人数が多い方が良かった」という意見もあった。そのため、もし今後もこのようなイベントを開催するならば、複数回にわたって行い、そのたびに大々的に告知することが必要になると思われる。

フォトアドベンチャーを終えてモザイクアートを作成している最中に、子供たち同士で遊んだり親同士で交流をしていたりした。さらに、5、6歳の子たちは、新たに友達になっていた。このイベントを通じて、私たちが目標にしていた「地域とのつながりを作る」ことを実感できるような光景を見ることができた。